

堀  
辰雄

姨  
捨





姨<sup>おば</sup>

捨<sup>すて</sup>

わが心なぐさめかねつさらしなや  
をばすて山にてる月をみて

よみ人しらず

## 一

上<sup>かずさ</sup>総の守<sup>かみ</sup>だった父に伴なわれて、姉や継母などと一し  
よに東<sup>あづま</sup>に下っていた少女が、京に帰って来たのは、ま  
だ十三の秋だった。京には、昔<sup>むかし</sup>気質<sup>かたぎ</sup>の母が、三条の宮  
の西にある、父の古い屋形<sup>やかた</sup>に、五年の間、ひとり留守  
をしていた。

そこは京の中とは思えないくらい、深い木立に囲まれ

た、昼でもなんとなく薄暗いような処だった。夜になると、毎晩、木菟ずくなどが無気味に啼ないた。が、田舎いなかに育った少女はそれを格別寂しいとも思わなかった。そうしてその屋形にまだ住みつきもしないうちから、少女は母にねだっては、さまざまそうしな草子を知辺から借りて貰ったりしていた。京へ上ったら、この世にあるだけの物語を見たいというのは、田舎にいる間からの少女の願だった。が、まだしるべも少い京では、少女の心ゆくまで、めずらしい草子を求めることもなかなかむずかしかった。

国くにのかみ守までした父も、母と同様、とかく昔気質の人だ

ったから、京での暮らしは、思ったほど花やいだものではなかった。が、少女はそういう父母の下で、いささかの不平も云わずに、姉などと一しよにつつましい朝夕を過ごしていた。「もつと物語が見られるようになれば好い」——只、少女はそう思っていた。

その年の末、一しよに東にも下っていた継母が、なぜか、突然父の許を去って行った。翌年の春にはまた、疫病のために気立のやさしかった乳母も故人になってしまった。この頃ある右馬頭うまのかみの息子がおりおり姉の許に通つてくる外には、屋形はいよいよ人けのなくなるばかりだ

った。が、当時何よりも少女の心をいためたのは、「これを手本になさい」と云われて少女が日ごとにその御手を習いながら、人知れず物語の主人公に対するようなあくがれの心を抱いていた、侍従じじゆうだいながん大納言の姫君までが、その春乳母と同じ疫病に亡なくなられてしまったことだった。「とりべ山谷に煙のもえ立たばはかなく見えし我と知らなむ」——少女が日頃手習をしていた姫君の美しい手跡しゅせきにそんな読人よみびとしらずの歌なんぞのあったのが、いまさら思い出されて、少女には云いようもなく悲しかった。が、そういう云いしれぬ悲しみは、かえって少女の心



に物語の哀れを一層沁み入らせるようなことになった。少女はもつと物語が見られるようにと母を責め立てていた。それだけに、その頃田舎から上って来た一人のおばが、源氏の五十余巻を、箱入のまま、他の物語なども添えて、贈ってよこしてくれたときの少女の喜びようというものは、言葉には尽せなかつた。少女は昼はひねもす、夜は目の醒めているかぎり、ともし火を近くともして几帳のうちに打ち臥しながら、そればかりを読みつづけていた。夕顔、浮舟、——そう云った自分の境界にちか  
い、美しい女達の不しあわせな運命の中に、少女は好ん

で自分を見出していた。いままだ自分はおさな穉くて、容貌もよくはないが、もつとおとなになつたら、髪などもずつと長くなり、容貌も上がつて、そういう女達のようにもなれるかも知れないなどと、そんな他愛のない考も繰り返し繰り返していたのだった。

古い池のほとりにある、大きな藤は、ふじ春ごとに花を咲かせたり散らしたりした。そのたびに、少女は乳母の亡くなつたのはこの頃だと悲しく思い出し、また、同じ頃亡くなつた侍従大納言の姫君の手跡を取り出しては、一人であわれがつたりしていた。そんな五月のある夜、夜

ふけまで姉と二人して物語など見ながら起きていると、少女の身ぢかに、猫の泣きごえらしいものが出し抜けにした。驚いて見ると、かわいい小猫が、どこから来たのか、少女の傍に来ていた。前にいた姉が「誰にも教えないで、私たちだけで飼いましようよ」と云って、傍に寝かせてやると、おとなしく寝ていた。もとの飼主がそれを捜していて、見つかりでもするといけな**い**と思つて、二人だけでこっそりとそれを飼つてやっていると、猫はもうはしため婢はしためたちの方へは寄りつきもせず、いつも二人にばかり絡からみついていて、物もきたなげなのは顔をそむけて

食べようともしなかつた。

一度、姉がわずらつて、何かと手がなかつたものだから、その猫を婢たちのいる北面きたおもてにやり放しにして置いたことがあつた。猫は、その間じゆう、北面の方で苦しうに泣きつづけていた。——すると、わずらつていた姉がふいと目を醒さまして、「猫はどこにいるの。こつちへよこしておくれ」と云うので、「どうかなすつて」と少女が云うと、姉はいましがた見た夢を話した。なんでもその猫が寝ている姉の傍かたわらに来て、こんな事を言つたのだそうだった。

「実はわたくしは侍従大納言殿の姫君の生れ変りなので  
ございます。前世からの因縁がありますのか、この中の君なか  
がわたくしのことをたいそう哀れがって思い出しなさい  
ますので、ただしばらくの間、ここに参っておりますた  
のに、今のように婢たちの中にばかり押し据えられてお  
りましては、なんともつらくてなりません——一人の  
品のよい、美しいお方が自分の傍で泣き泣きそんなこと  
を云われているように思って、驚いて目を醒さますと、そ  
れはさつきから泣きつづけている猫の声だったと云うこ  
とだった。

そんな夢のことがあってから、猫はもう北面へも出さ  
れずに、今までよりか一層姉妹に大事にかしずかれてい  
た。一人ぎりできるときなど、よく少女はその猫を撫で  
ながら、「おまえは大納言様のお姫君ですのね。そのう  
ちお父う様からでも大納言様にお知らせ申すようにいた  
しましうね」と云いかけたりした。すると猫も、気の  
せいか、それを聞き分けでもするかのようになり、長泣きな  
どしながら、いつまでも少女の顔を見かえしていた。

夜なかに急に火事が起って、その三条の屋形が跡かた  
もなく焼けてしまったのは、その春の末のことだった。

その火事と共に、大納言の姫君と思われて可哀がられていた猫もゆくえ知れずになってしまった。——ひとまず、立退いた先の屋形は、非常に狭苦しくて、木なんぞはな  
 んにもなかった。そのかわり、隣家の生い茂った木立が  
 目のあたりに見え、何かの花の匂においなどが風につれてこ  
 ちらまで漂って来るにつけても、少女は昔の木立の多か  
 った屋形を、——また、それと一しよに焼け死んだのか  
 も知れない猫のことなどを、切ないほどあざやかに蘇よみがえ  
 らせたりしていた。

ある月あかりの夜、おおかたの人が寝しずまった夜な

かまで、少女は姉と一しよに起きて、その家の端近くに  
出て物語などしあっていた。そのうち話もと絶えがちに  
なって、二人は黙って空をじつと仰いでいた。

「このまま私がすうと飛び失せて、ゆくえ知れずになっ  
てしまったら、どうだろうかしら」姉が出し抜けにそん  
なことを口にした。

少女はおそろしそうに顔を伏せた。穉おさない頃、死んだ  
乳母から聞かされた、女が一人ぎり長いこと月に照ら  
されていると物に憑つかれるなんぞと云う話を急に思い出  
したからだった。姉はそういう少女に気がつくど、わざ



とらしく笑いながら、何か外のことに云いまぎらわせようとした。が、少女はすっかり怯え切つて、いつまでも顔を袖にしていた。

程経て、隣りの家の前に男車らしいものの駐まる音がした。そうして「荻の葉、おぎの葉」と呼ばせているのが手にとるように聞えて来た。が、隣家からは誰もそれに返事をしないらしかった。とうとう男は呼びわずらわたらしく、こん度は笛をおもしろく吹き出した。

姉妹は思わず目を見合せて、ようやく明るい微笑を交しながら、なおも息をつまらせて耳を敬そばだてていた。し

かし、隣家からは、相不変あいかわらず、なんの返事もないらしかった。男はとうとう、笛を吹き吹き、その家の前を通り過ぎて往った。――

互に慰めもし、慰められもしたそんな一人の姉が、佗かりずみびしい仮住の家で、二番目の子を生んで亡くなったのは、それから間のないことだった。母なんぞがその死んだ姉の傍に往ってしまっている間、少女はひとりで、形見に残った穉い児たちを左右に寝かしつけていた。知らぬ間に荒れた板葺いたぶきのひまから月が洩れて、乳児ちごの顔にあたり、それを無気味に青ざめさせていた。少女はふいと前の月

夜のことを思い出し、その顔へ自分の袖をかけてやりながら、いま一人の穉児おさなごをひしと抱き締めて、そこにいつまでも顔を伏せていた。

## 二

新しい普請ふしんの出来上った三条の屋形では、古い池と共に焼け残った藤が、今年はどういうものか、例年になくみごとな花をつけた。それが一層屋形の人けの絶えたのを目立たせているような単調な日々の中で、少女はまた

昔のとおりに、物語を見ては、夢みがちに暮らしていた。昔風の父母は、もちろん、まだこの少女を誰かにめあわせようなぞとは考えもしなかった。が、さすがに少女ももうだいたいおとなびては来ていた。

父が或秋の除日じもくに常陸ひたちの守かみに任ぜられた時には、女むすめはいつか二十になっていた。女はこん度は母と共に京に居残って、父だけが任国に下ることになった。「ことによると、もうお前たちにも逢えないかも知れない」——そんな心細そうなことばかりを云っている年老いた父を一人で旅に出すのは、もちろん、女には何よりもつらか

った。が、すっかりおとなになった女の身としては、父と一しよにそんな田舎へ下ることも出来悪にくかった。

ある風立った日、父が京に心を残し残し常陸へ下って往った後、女はもう物語のことも忘れてしまったように、明け暮れ、東の山ぎわを眺めながら暮らしていた。「今頃お父う様はどこいらを旅なすっていらっしやるだろう」と、穉おさない頃東から上ってきた遠い記憶を辿りたどながら、その佗びしい道すじのことを浮かべていると、父恋しきは一層まさるばかりだった。朝がた、東の方の黒ずんだ森から、秋の渡り鳥らしいのが一群、急に思い出し

たように一しよに飛び立って、空を暗くしては山の彼方へ飛び去って往くのなんぞを、女は何がなしいつまでも見送っていた。

晩秋の一日、女は珍らしく思い立って、太秦うずまさへ父の無事を祈りに、ひとりで女車に乗って出掛けた。一条へさしかかると、その途中に、物見にでも出掛けるらしい一台の立派な男車が何かを待ちでもしているように駐とまっていた。女が簾を深く下ろさせたまま、その前を遠慮がちに通り過ぎて往ってから、しばらくして気がつくとき、さっきの男車らしいものが跡から見え隠れしながら附い

て来ていた。女はそれを気にするように、すこし車を早めながら、太秦まで往き着いて寺にはいつてしまおうと、いつかもうその男車は見えなくなっていた。しかし、寺に数日籠こもって、父の無事を一心になつて祈っている間も、どうかすると女にはあの立派な男車がおもかげに立って来てならなかった。「もしかしたら——」が、女はそんな考えを逐おい退のけるように、顔を振って、ひたすら父の無事を祈っていた。

ちようどその頃、父は遠い常陸の国に、供者もわずか

数人具したぎりりで、神拝をして巡っていた。一行はその日の暮、一つの川を真ん中に、薄赤い穂を一面になびかせているある広々とした芒野すすきのを前にしていた。その芒野の向うにはまた、こんもりと茂った何かの森が最後の夕日に赫かがやいていた。

国守くにのかみは、なぜかしら、突然京に残した女のことを思い出していた。そうして馬に跨またがったまま、その森の方へいつまでも目を遣やっていた。そのうちどこから渡って来たのか、一群の渡り鳥らしいものが、その暮れがたの森の上に急に立ち騒ぎ出した。国守は、その鳥の群がよ



うやくその森に落ち着いてしまふまで、空うつけたようにそれを見つづけていた。

## 三

それから五年立つた秋、父はやつと任を果して、常陸から上つて来た。とにかく無事に任を果して来たと言ふものの、父はいたいたしいほど、窶やつれていた。そうしてもう、こん度の上京かぎり、官職からも身を退いて、妻や女を相手に、静かに月日を送りたいと云うより外は何

も考えないでいるらしかった。それほど古い耄けたように見える父は、女にはいかにも心細かった。女はもう自分の運命が自分の力だけではどうしようもなくなつて来ていることに気がつかずにはいられなかつた。しかし、そういう境界の変化も、此女の胸深くに根を下ろしている、昔ながらの夢だけはいささかも変えることは出来なかつた。女は自分の運命が思いの外にはかなく見えて来れば来るほど、一層それを頼りにし出していた。「こういう少女らしい夢を抱いたまま、埋もれてしまふのも好い」——そうさえ思つて、女は相不変、あいかわらず几帳のかげに、

物語ばかり見ては、はた目にはいかにも無為な日々を送っていた。

「そうやってなんにも為<sup>せ</sup>ずにいらっしやるよりは——」  
と云って、この頃しきりに宮仕えを勧めて来る人があった。幾らか縁故もあるその宮からも、是非女を上がらせるようにと再三云ってよこしたりした。その宮というの  
は、今をときめいている一の宮だった。が、昔<sup>むかし</sup>気質<sup>かたぎ</sup>の  
父母は、何かと気苦労の多い宮仕えには反対だった。女  
はもちろん、父母の意に背<sup>そむ</sup>いてまで、そんな宮仕えなど  
に出たいとも思わなかった。しかし、人々が「この頃の

若いお方はみんな宮仕えに出たがっておりますよ。そうすれば自然に運がひらけて来ることもありますからね。ともかくも、ためしにお出しになつては——」などと、なおも熱心に勧めて来るので、とうとう父母もその女の行末を案じ、宮にさし出す事にしごしご渋々納得した。これまでに安らかな無為の中にばかり自分を見出していた女は、急に自分の前に何やら不安を感じながら、それでも外に為し様がようないように人々の云うとおりになつていた。

人出入の多い宮仕えは、世間見ずの女には思いの外につらいことばかりだった。もとより、それが物語に描い

てあるようなものではないことは、女も承知していた。が、冬の夜など、御前の近くに、知らない女房たちの中に伏しながら、ほとんどまんじりともしないでいることが多かった。そうして女は夜もすがら、池に水鳥が寝わずらって羽搔はがいでいるのを耳にしたりしていた。また、昼間、自分の局つぼねに下がっている時には、ひねもす、この頃自分のことをいかにも頼りにし切っているような老いた父の姿などを恋しく思い浮べていた。亡き姉の遺児たちも、夜はたいがい自分の左右に寝かすようにしていたのに、今はどうしているだろうと気がかりになってな

らないこともあった。が、そんな人知れない思いさえ、傍から人に、見られているかと思うと、どうも気づまりで思うようには出来悪にくかった。

ときおり女が三条の屋形に下がって往くと、父母は炭すみ櫃びつに火など起して、女を待ち受けていた。「おまえがいておくれだった時は、人目も見え、婢たちも多かったが、この頃というものは、ほとんど人けが絶えて、一日じゅう人ごえもしないくらいだ。ほんとうに心細くって為様がない。こんな具合では、一体、おれたちはどうなるのだらうなあ」そんなことを父は長々と女に云って聴かす

のだった。御前などでは、他の女房たちの蔭に小さくなって、ほとんどあるかないかにしているのに、そんな自分も里に下りるとこれほど頼もしがられるのかと思うと、そんなことを云う父のみならず、云われる自分までが、なんだかいたわしくってならなかった。

が、五六日立つと、女はまた気を引き立てるようになって、宮へ上がって往くのだった。

## 四

女の仕えていた宮が突然お亡くなりになったのを機会しおに、女はしばらく宮仕えから退いて、また昔のように父母の下でつつましい朝夕を送り出していた。さすがに宮仕えをした後には、女はもう世の中が自分の思ったようなものではないことをいよいよ切実に知り出していた。

薫かおる大将たいしだの、浮舟うきふねだのがこの世にあり得ようはずがないこともわかりすぎるくらいわかって来た。が、一方、



女はそういうふうにも為様のないような詮あきらめに落ち着こうとしている自分が、かえって昔の自分よりもふがひなく思えてならなかった。

その後も宮からは、絶えず女をお召しになっていた。亡くなられたお方の小さい御子たちの相手に女の姪たちを連れて来て貰いたいと云うのだった。女はもう自分だけなら、このまま静かに老いるのも好いと考えていた。それほど女は身も心も疲れ切っていた。しかし、ようやくやおとなびて来た姪たちのことを考えると、この子たちだけは自分のようにさせたくない、せつかくの宮から

のお召を拒みかねて、二人に附添こぼってはおりおりまた出仕をするようになった。が、こん度は女は宮でもまるつきり新参というのでもなく、そうかと云ってまた古参というほどでもないので、ただなんということなしに女房たちの中に雑まじって、もとの朋輩ほうばいたちと気やすく語らつてさえいれば好かった。もう別に宮仕えだけで身を立てようなどともしていないので、外の女房たちが自分よりも上の思召おぼしめしが好かろうと羨うらやましいとも思わなかった。そうして、古参の女房からいろんな昔の知りびとの噂うわさなどを聞いては、それを淡々と聞き過していた。一方、

こうしてこの頃のように自分がそれに即かず離れずの気もちでいられるようになってから、ようやく宮仕えと云うものの趣を自分でも分かりかけて来たような気もしないではなかった。

ある冬の暗い夜のことだった。上では不断経ふだんぎようが行われていたが、ちようど声のよい人々が読経する時分だというので、一人の女房に誘われるまま、女はそちらに近い戸口に往って、そこに伏しながら、それを聴いていた。しばらくそうして聴いていると、そこへ殿上人てんじようびとらしい男が一人、そういう二人には気がつかないように近づい

て来た。

「どなただか知らないけれど、急に隠れたりなんぞするのも見ぐるしいから、このままこうしておりませう」と、相手の女房が云うので、その傍に女もじつと伏せていた。

その男は、戸口の近くにそういう二人を認めると、前からの知合らしい一方の女房に向かつて、非常に穏かな様子で詞ことばをかけた。「いまお一人はどなたですか——」などとも問うたが、女が困って何んとも返事をせずにも、それ以上執拗しつようには尋ねなかつた。そうしてそのま

ま二人の傍にすわりながら、そのどちらに向かつてともつかず、世の中のあわれなことどもをそれからそれへと言い出して、女たちにも真面目に問いかけたりするので、女もついそれに誘われて、いつか二こと三こと詞を交わしていた。「まだ私の知らないこういうお方がいられたのですね——」などと珍らしそうに男は女の方を向いて云って、いつまでも気もち好きそうに話し込み、なかなかそこを立ち上がりそうにもなかつた。

星の光さえ見えなくらいに真つ暗な晩で、外にはと  
きどき時雨しぐれらしいものが、さつと木の葉にふりかかる音

さえ微かすかにし出していた。

「こういう晩もなかなか好いものですね」男はそう云いさして、微かに木の葉にかかる時雨の音に耳を傾けながら、急に何か考え出したように沈黙していたが、それから徐しずかにこんなことを語り出した。

「どうした訳わけですか、私は今ふいと十七年ほど前のある晩のことを思い出しております。それは私が齋宮さいぐうの御裳も著ぎの勅使で伊勢いせへ下った折のことです。伊勢に上つておる間、ほとんど毎日、雪に降りこめられておりました。ようやく任も果てたので、その明けがた京へ上ろうかと

思つて、お暇乞いとまごに参上いたしますと、ただでさえいつも神々しいような御所でしたが、その折はまた円融院えんゆういんの御世からお仕えしているとか云う、いかにも神さびた老女が居合わせて、昔のことなどなつかしそうに物語り出し、しまいにはよく調べた琵琶びわまでも聞かせてくれました。私もまだ若い身空でしたが、何んだかこうすっきりその琵琶の音が心に沁しみ入つて、ほんとうに夜の明けるのも惜しまれたくらいでした。——それからというものの、私はそんな冬の夜の、雪なんぞの降っている晩には極きまつてその夜のことを思い出し、火桶ひおけなどかかえながらで

も、かならず端近くに出ては雪をながめておったものでした。——そんな若い時分のことともこの頃ではつい忘れがちになっておりましたのに、今、こうしてあなたたちと話し込んでいますうち、その夜のこととが急になつかしく思い出されて来たのです。どういう訣わけのものでしょうか。——そう云えば、今宵こよいもこれほど私の心に沁み入っていますので、これからはきつとこんな真暗な、ときどき打ちしぐれているような冬の夜のこととも、その斎宮の雪の夜と一しよに、折々なつかしく思い出されることでしょうか。……」



男はそんな問わず語り<sup>し</sup>を為<sup>し</sup>はじめた時と少しも変らない静かな様子で、それを言い<sup>お</sup>畢<sup>お</sup>えた。

男が程経て立ち去った跡、女たちはそのままめいめいの物思いにふけりながら、いつまでもそこにじっと伏せていた。雨は、木の葉の上に、思い出したように寂しい音を立て続けていた。

## 五

こんなことがあってからも、女が何かと里居がちに、

いかにも気がなさそうな折々の出仕を続けていたことには変りはなかった。が、出仕している間は、いまままでよりも一層、他の女房たちのうちにことばすくな詞少ことばすくなになつて、一人でぼんやりと物など跳めているようなことが多かつた。しかし、何かの折にいつかの女房と一しよになりでもすると、互に話もないのにいつまでもその女房の傍にいて何か話をしていたそうにしていたり、また、相手があの時雨の夜のことをそれとなく話題に上そうとでもすると、あわ慌あわててそれを他にそ外そらせようとしたりした。しかし、女はいつかその男が才名の高い右大弁うだいべんの殿であることな

どをそれとはなしに聞き出していった。——そうやって宮に上っていても何か落ち着きを欠いている女は、里に下りて、気やすく老いた父母だけを前にしている時は、一層心も空のようにして、何か問いかけられても返事もはかばかしくなかつたりした。そうして一向ひとむきになつて何かを堪え忍んでいるような様子が、その頃から女の上には急に目立ち出していた。

右大弁はときどき友達と酒を酌くんでいる時など、ひよいとその時雨の夜のこと、——それからそのとき語り合

った二人の女のうちの、はじめて逢った方の女のことなぞを思い浮べがちだった。男はもちろん、外にも幾たりかの女を知っていた。また、大方の女というものがどういうものであるかも知悉ちしつしたつもりでいた。——しかし、その時雨の夜のように、何ぶん暗かったのでその女の様子なんぞよく見られなかったせいもあるかも知れないが、その女といかにもさりげなく話を交ひしていただけで、何かこう物語めいた気分の中に引き摩ずられて行くような、胸のしめつけられるほどの好い心もちのしたことなどはこれまでついぞ出逢ったことがなかった。何かと云

えばいま一人の女房を立てて、自分はいかにも控え目にしていた、そんな内端うちわな女のそういう云い知れぬ魅力と  
いうものはどこから来るのだろうか、男は自問自答し  
た。もう一度で好いから、あの女と二人ぎりでしめやかな物語がして見たい。私の琵琶を聞かせたらどう聞くだろうか、——この頃になくそんな若々しいことまで男は思ったりもしていた。しかし、男は何かと公儀の重い身で多忙なうちに、その女のことと次第に忘れがちになつて往つた。——が、ときどき友達と酒でも酌んでいるよ  
うな時に、思いがけずふいとその髻ほのかに見たきりの女の

髪の具合などがおもかげに立って来たりした、……。

その翌年の春だった。ある夜、右大弁はまたその一の宮に音楽のあそびに招かれて往っていた。暁あけがた、男は一人で庭に降り立って、ほんのりとかかった緋ほそい月を仰ぎ仰ぎ、読経などをしながら、履音くつおとをしのばせてそぞろ歩きしていた。細殿ほそどのの前には丁子ちようじの匂が夜気に強く漂っていた。男はそれへちよつと目をやりながら、遣戸やりどの前を通り過ぎようとした時、ふいとその半開きになっていた遣戸の内側に一人の女のいるらしいけはいとらを捉え

た。女房の一人でも月を眺めているのだろうくらいに思  
つて、男は何の気なしにそれへ詞ことばをかけた。内の女は  
しばらく身じろぎもしないでいたが、やっとためらいが  
ちに低く返事をした時、男ははじめてそれが誰であつた  
かに気がついた。

「あなたでしたか。あの時雨の夜はかた時も忘れずにな  
つかしく思っております」

男はわれ知らず少し上ずったような声を出した。

そうしてそのまま男は黙って返事を待っていた。遣戸  
の内からは、しばらくすると女がこんな歌をかすかに口

ずさむのが聞えて来た。

「なにさまで思ひ出でけむなほざりの木の葉にかけし時雨ばかりを」

その時その細殿の方へ履音を響かせながら、五六人の殿上人たちが男を追うようにやって来た。男はそれとほとんど同時に、遣戸の奥へ女がすべり込んで往くけはいに気がついた。

男は殿上人たちに拉らっせられながら、細殿の前に漂たっていた丁子の匂を気にでもするようになり、その方を見返りがちに、再び履音をさせながらそこを立ち去って往った。



## 六

女が、前の下野しもつけの守かみだった、二十も年上の男の後妻と  
なったのは、それから程経てのことだった。

夫は年もとっていた代り、気立のやさしい男だった。  
その上、何もかも女の意をかなえてやろうとしていた。  
女ももちろん、その夫に、悪い気はしなかった。が、女  
の一向ひとつむねになって何かを堪え忍んでいようとするような様  
子は、いよいよ誰の目にも明らかになるばかりだった。

しかし、もう一つ、そう云う女の様子に不思議を加えて来たのは、女が一人でおりおり思い出し笑いのような寂しい笑いを浮べていることだった。——が、それがなんであるかは女の外には知るものがなかった。

夫がその秋の除日じもくに信濃しなのの守に任ぜられると、女は自ら夫と一しよにその任国に下ることになった。もちろん、女の年とつた父母は京に残るようにと懇願した。しかし、女は何かすでに意を決したことのあるように、それにはなんとしても応じなかった。

ある晩秋の日、女は夫に従って、さすがに父母に心を

残して目に涙を溜めながら、京を離れて往った。穉い  
 頃多くの夢を小さい胸に抱いて東から上って来たことのある逢坂おうさかの山を、女は二十年後に再び越えて往った。「私の生涯はそれでも決して空しくはなかった——」女はそんな具合に目を赫かがやかせながら、ときどき京の方を振り向いていた。

近江おうみ、美濃みのを過ぎて、幾日かの後には、信濃の守の一行はだんだん木深こぶかい信濃路しなのじへは行って往った。



日本文学電子図書館

---

「堀辰雄 日本の文学42」

著 者：堀 辰雄

制作者：宮澤一郎

出版社：中央公論社

昭和39年9月5日発行

---



日本文学電子図書館